

自然を語る会 報告

2019年11月16日 10:00~12:00

日比谷 緑と水の市民カレッジ 交流室

担当 鈴木善次さん

レイチェル・カーソンの「想い」と環境教育 ～「生命の畏敬の念」とどう向き合うか～というタイトルで話し合いました。カーソンはシュヴァイツァーの「生命への畏敬の念」に大きな影響を受けていますが、これは

地球上のすべての生き物にとって「生きる」ことが本質であり、それにプラスにかかわることが「善」、マイナスにかかわることが「悪」であるという認識のもとに生き物に接する心情

のことだそうです。ただ、実際にはそうは言っていない部分があります。①「食べるということ」②外来生物、③「医療技術に関連する場合」などが問題提起されました。

- ① 山村留学した子どもに、子どもたちが飼育したニワトリを「食べるか食べないか」という討論をしたという例が紹介されました。ボーイスカウトでも同様なことをしたが、その後子どもによっては鶏肉を食べなくなり、親から苦情が出たという話もありました。
- ② 外来種は困ることはわかるが、最近テレビなどでタレントが外来種を悪者扱いしているのは気になるという意見が述べられました。
- ③ 動物性集合胚（ヒトの臓器を持つ動物）の研究が進められていると、参加されたJさんから話がありました。これは臓器移植に使いたい臓器を作る遺伝子を、動物から切り取った上でヒトのiPS細胞などを注入して、ヒトの臓器細胞を動物に作らせようというものです。参加者からは人間の生死は普通でありたいという意見と、子どもに臓器移植が必要な場合、海外に行って実施するには莫大なお金が必要だし、できるようになったらやるかもしれない、という様々な意見がありました。

どのケースも、結論が出るようなものではありませんがこれからも考え続けていきたいと思いました。

(小川 記)